

18

高齢者世帯における水害対応の実態

18.1 高齢者世帯における家財の保全行動と家財被害

Point

- ・高齢者世帯は、高齢者がいない世帯よりも家財の被害が多い。そのため、高齢者世帯において発生した家財のゴミの量も、高齢者がいない世帯に比べて多くなっている。

本節では、高齢者のみ世帯の家財被害の有無と被害の程度を、高齢者同居世帯および高齢者がいない世帯との比較により把握する。

図 18-1-1 は、高齢者のみ世帯と高齢者がいない世帯の家財の被害状況を示したものである。

- ・どちらの世帯も、貯金通帳などの重要書類といった、高齢者でも移動し易いものの被害は 30%前後に留まっているものの、特に移動が困難な大きな家財については、高齢者のみの世帯における被害が、高齢者のいない世帯と比較して多くなっている。

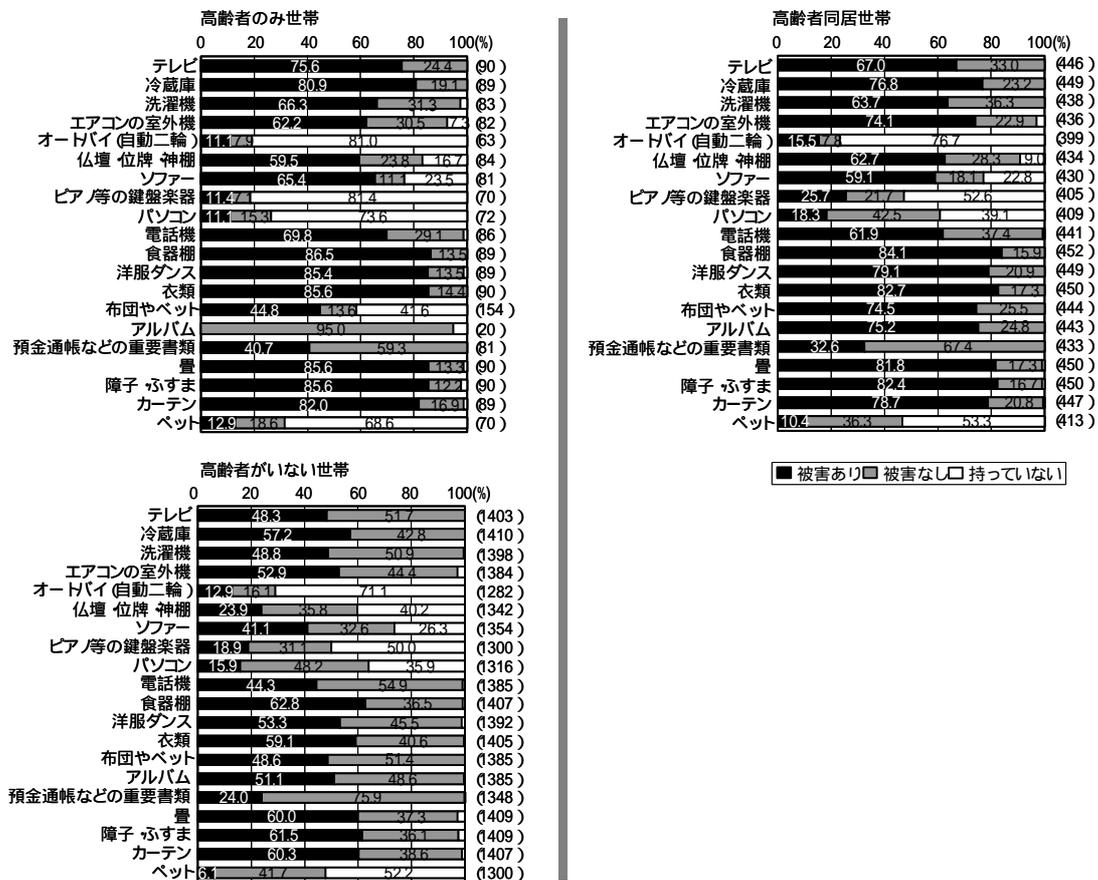


図 18-1-1 高齢者世帯にみる家財被害の状況

図 18-1-2 は家財の保全行動の実施状況を、高齢者のみ世帯と高齢者がいない世帯との比較のもとで示したものである。

- ・ 高齢者のみの世帯では、高齢者のいない世帯よりも、家財の保全行動を行うつもりはあったが行えなかった世帯が多くを占めている。特に、移動に大きな労力を要する家財に関しては、その傾向が顕著であり、このことが、被害の拡大に影響しているものと考えられる。

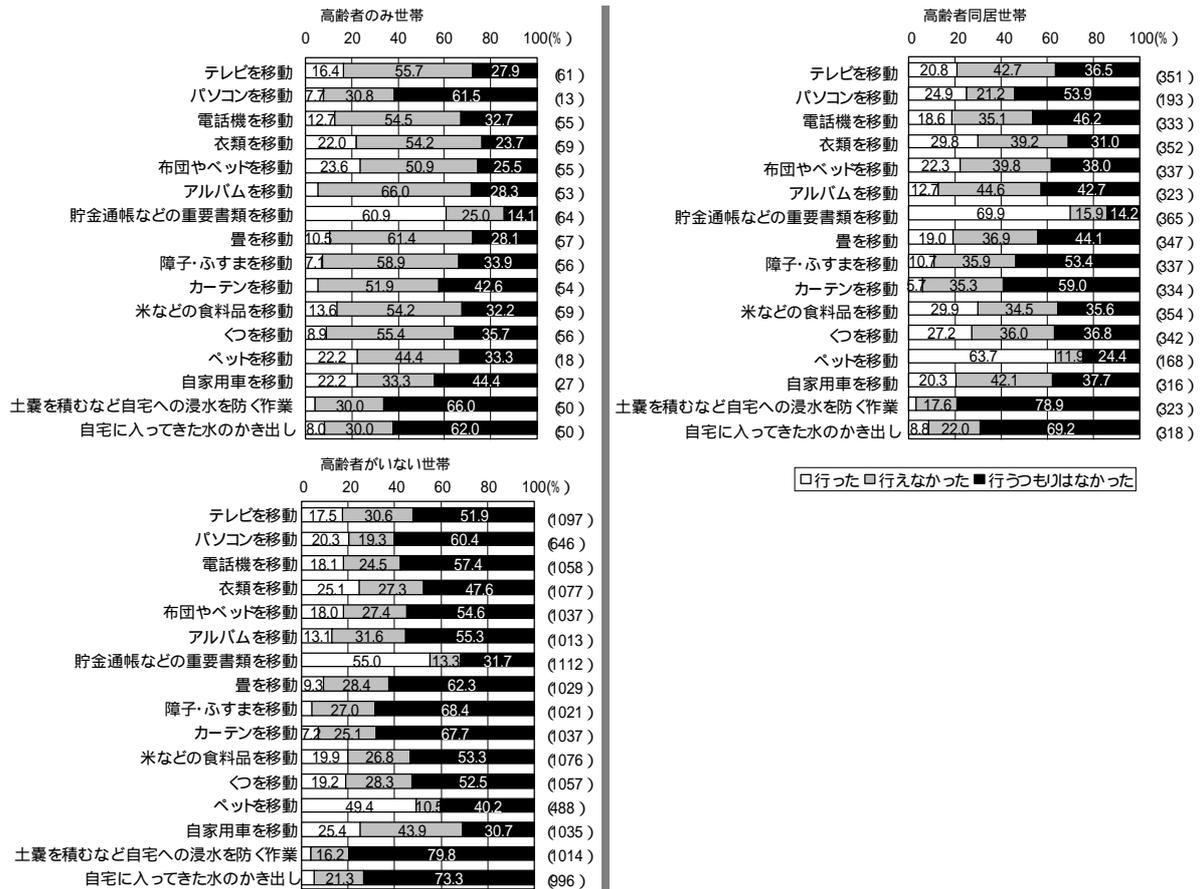


図 18-1-2 高齢者世帯にみる家財保全行動の状況

図 18-1-3 は、東海豪雨災害で生じた家財道具のゴミの発生量を示したものである。

- ・ 高齢者のみ世帯では、「1階にある家財道具のおよそすべて」と回答している世帯が40%を占めており、高齢者同居世帯や高齢者がいない世帯に比べてゴミの発生量が多いことがわかる。このことから、高齢者世帯では、洪水時における家財の保全行動が困難であったことが伺える。

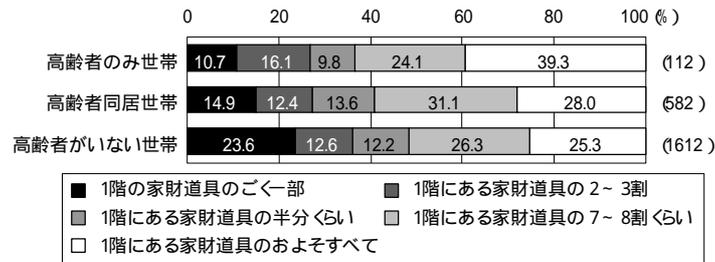


図 18-1-3 高齢者世帯にみる家財のゴミの発生量

18.2 高齢者世帯における避難勧告の情報取得

Point

- ・避難勧告発令時の情報取得手段として最も多いメディアは、広報車であった。
- ・高齢者世帯においては、テレビやラジオなどのマスメディアによる情報取得よりも、近所の人や町内会役員など近隣住民間での情報の伝達が多く行われていた。

本節では、避難勧告（9月11日深夜の避難勧告）が伝わったと回答した高齢者のみの世帯が、この避難勧告をどのような手段によって取得したのかを高齢者同居、高齢者がいない世帯との比較によって把握する。

（1）調査対象地域全体の高齢者世帯における情報取得

図18-2-1は、調査対象地域で、9月11日における避難勧告の情報を知った人がどのようなメディアによって入手したのかを示したものである。

- ・高齢者のみ世帯で、最も多いのは広報車である。
- ・高齢者のみの世帯では、近所の人からの口伝てなど住民間での情報伝達が、他の世帯よりも多い。

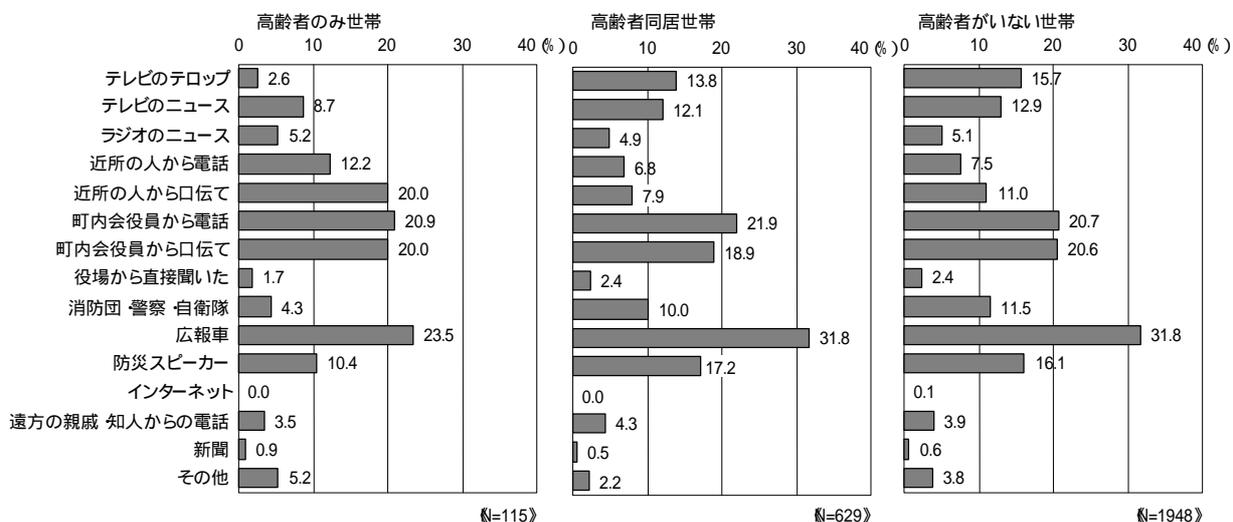


図18-2-1 高齢者世帯にみる避難勧告時の情報取得方法

(2) 西枇杷島町の高齢者世帯における情報取得状況

図 18-2-2 は、西枇杷島町の高齢者世帯が避難勧告をどのように取得したのかを示したものである。

- ・高齢者のみの世帯では、テレビやラジオなどのマスメディアによる情報取得が 10%未満と、高齢者同居世帯や高齢者がいない世帯よりも低い割合になっているが、その一方で、近所の人からの口伝てや電話によって情報を入手している人の割合が多い。

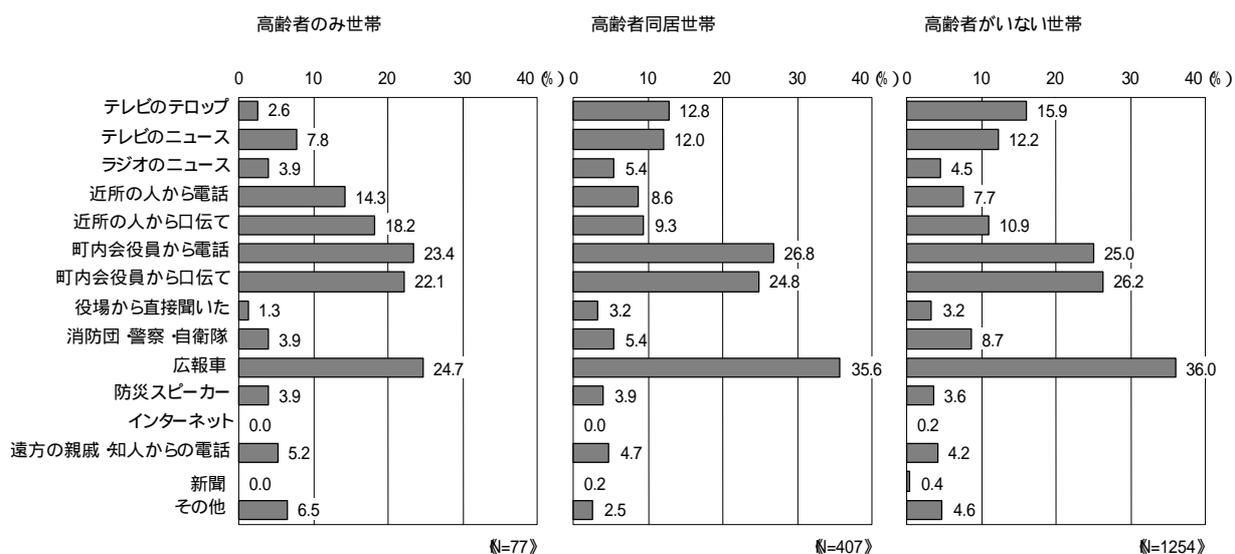


図 18-2-2 西枇杷島町の高齢者世帯にみる避難勧告時の情報取得方法

18.3 高齢者世帯における避難勧告発令時の危機意識

Point

- ・多くの高齢者世帯が避難勧告発令時において危機意識を持ち、身の危険を感じていることがわかる。
- ・避難勧告発令時においては、高齢者世帯の60%は近所の人から避難の誘いを受けている。

本節では、西枇杷島町の高齢者世帯の、9月11日深夜に避難勧告が発令された時期の危機意識や周囲の状況などを高齢者同居世帯と高齢者がいない世帯の比較により把握する。

(1) 高齢者世帯でみる家屋浸水に対する危機意識

図18-3-1は、避難勧告が発令された頃に、自宅の浸水に対してどのような危機意識を持っていたのかを示したものである。

- ・高齢者のみ世帯では、高齢者がいない世帯に比べて自宅浸水の危険を意識している。さらに、どの程度の浸水になるのかについては、高齢者がいる世帯よりもいない世帯の方が、「浸水しないと思った」と回答している割合が多い。
- ・浸水に対して、どの程度の身の危険を感じたのかについては、「強く感じた」、「感じた」を合わせると、高齢者のみ世帯で身の危険を感じた人は半数以上を占めており、これは他の世帯に比べ大きい。

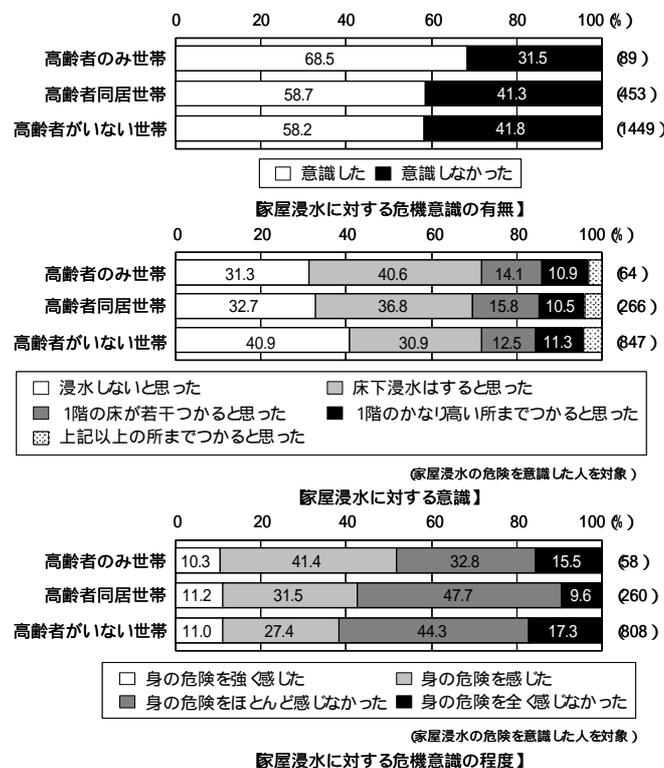


図18-3-1 高齢者世帯で見る避難勧告発令時の自宅浸水に対する危機意識

(2) 避難勧告発令時における避難の必要性

避難勧告発令時における避難の必要性を感じた程度を図 18-3-2 に示す。

- ・避難の必要性を意識したのは、高齢者のみ世帯において 64%と、高齢者同居世帯や高齢者がいない世帯よりも高く、さらに避難の必要性を感じている人の割合も高齢者のみ世帯が多い。
- ・避難勧告発令時において避難の必要性を感じた高齢者のみ世帯は 70%を占めており、他の世帯よりも高い割合となっている。

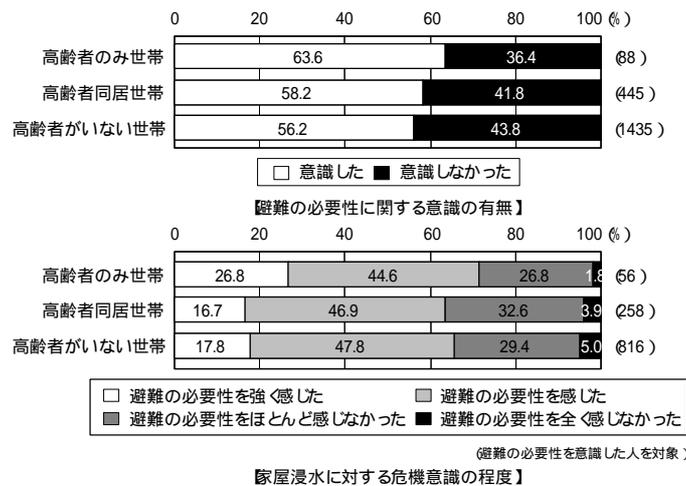


図 18-3-2 避難勧告発令時における避難の必要性

(3) 避難勧告発令時における外出に対する危険意識

図 18-3-3 は避難勧告発令時における、外出することに対する危険意識を示したものである。

- ・「危険を感じた」、「どちらかという危険を感じた」を合わせると、高齢者のみ世帯において 66%が危険を感じていると回答しており、他の世帯よりも危険意識が高かったことがわかる。

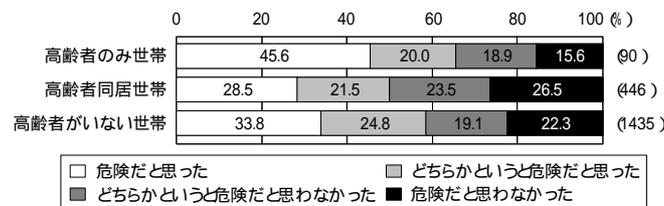


図 18-3-3 避難勧告発令時における外出に対する危険意識

(4) 避難勧告発令時における近所の避難状況

図 18-3-4 は、避難勧告発令時において、高齢者世帯が近所の状況をどれほど把握しているのかを示したものである。

- ・「わからなかった」といった近所の状況を全く把握していない人が、高齢者のみ世帯において 40%と なっており、高齢者同居世帯や高齢者がいない世帯よりも多い。

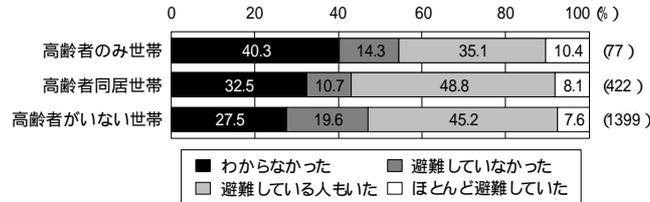


図 18-3-4 避難勧告発令時における近所の避難状況

(5) 避難勧告発令時における周囲からの誘い

図 18-3-5 は、避難勧告発令時において避難を勧誘してくれた人の有無と、誘ってくれた相手を世帯構成別に示したものである。

- ・避難勧告発令時において避難の勧誘をしてくれた人がいたのは、高齢者のみ世帯が 63%と最も多い。
- ・避難の勧誘をしてくれた人を見ると、高齢者のみ世帯では「近所の人」が 60%を占めており、地域住民間での避難時における高齢者への積極的な支援があったものと思われる。

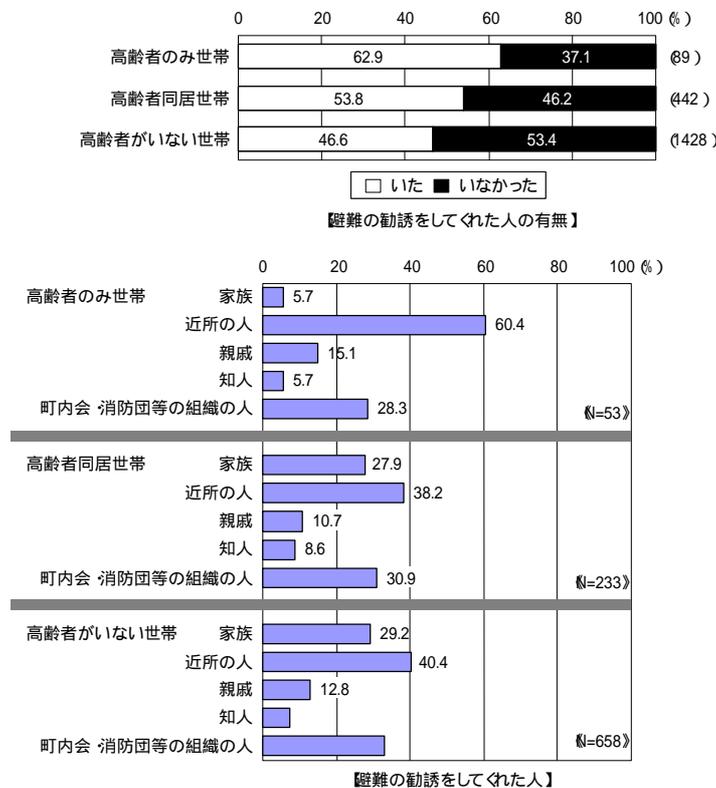


図 18-3-5 避難勧告発令時における周囲からの誘い

18.4 高齢者世帯における避難行動

Point

- ・ 高齢者のみ世帯の避難率は、高齢者同居世帯や高齢者がいない世帯よりも、比較的早い段階において高いものとなっている。
- ・ 高齢者のみ世帯の避難開始タイミングのピークは、高齢者がいない世帯よりも1時間ほど遅れて分布している。

ここでは、西枇杷島町における高齢者世帯の避難行動の実態を、避難率、避難タイミング、避難行動の有無といった3つの観点から把握する。

(1) 高齢者世帯の避難率および避難のタイミング

図18-4-1は、西枇杷島町における高齢者世帯、高齢者同居、および高齢者がいない世帯それぞれの避難率を示したものである。

- ・ 高齢者のみの世帯は、比較的早い段階から高齢者同居世帯や高齢者がいない世帯よりも避難率が高くなっている。

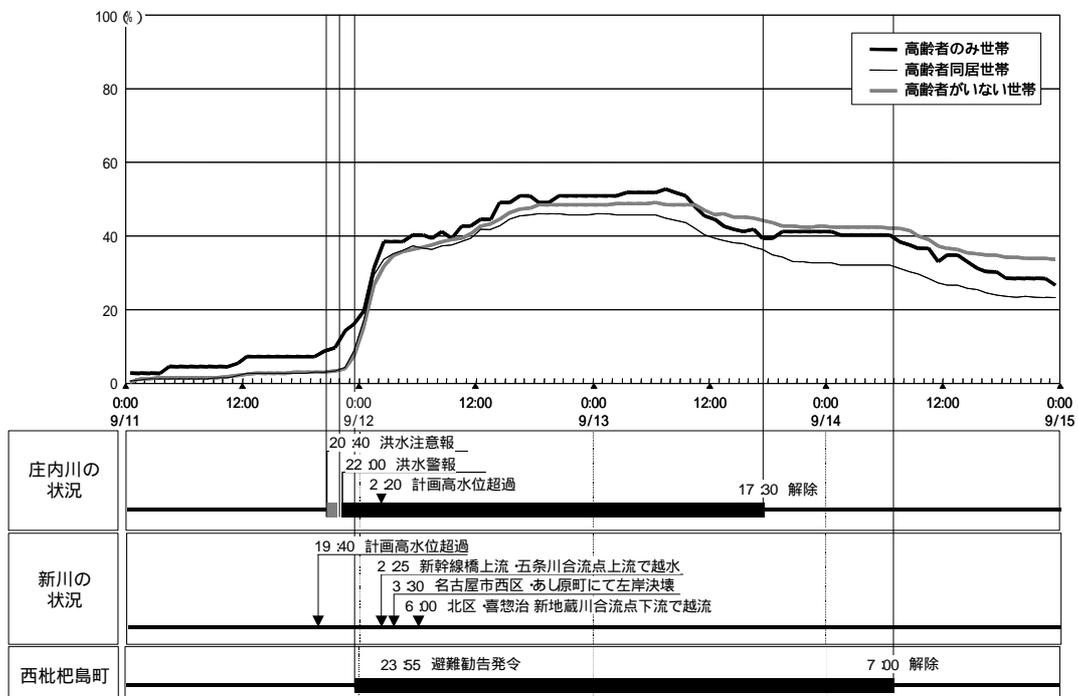


図18-4-1 世帯形態別の避難率（西枇杷島町）

次に、図 18-4-2 において、西枇杷島町における個人単位の避難開始のタイミングを世帯別に示す。

- ・高齢者同居世帯と高齢者がいない世帯の避難開始のタイミングが 9 月 12 日午前 1 時から午前 2 時の間に集中しており、避難勧告が発令されてから約 1 時間後には多くの人が避難を開始していたのに対して、高齢者のみ世帯の避難開始のタイミングは、同日午前 2 時から午前 3 時の間に集中しており、高齢者のみ世帯の避難開始の時期が遅いことがわかる。

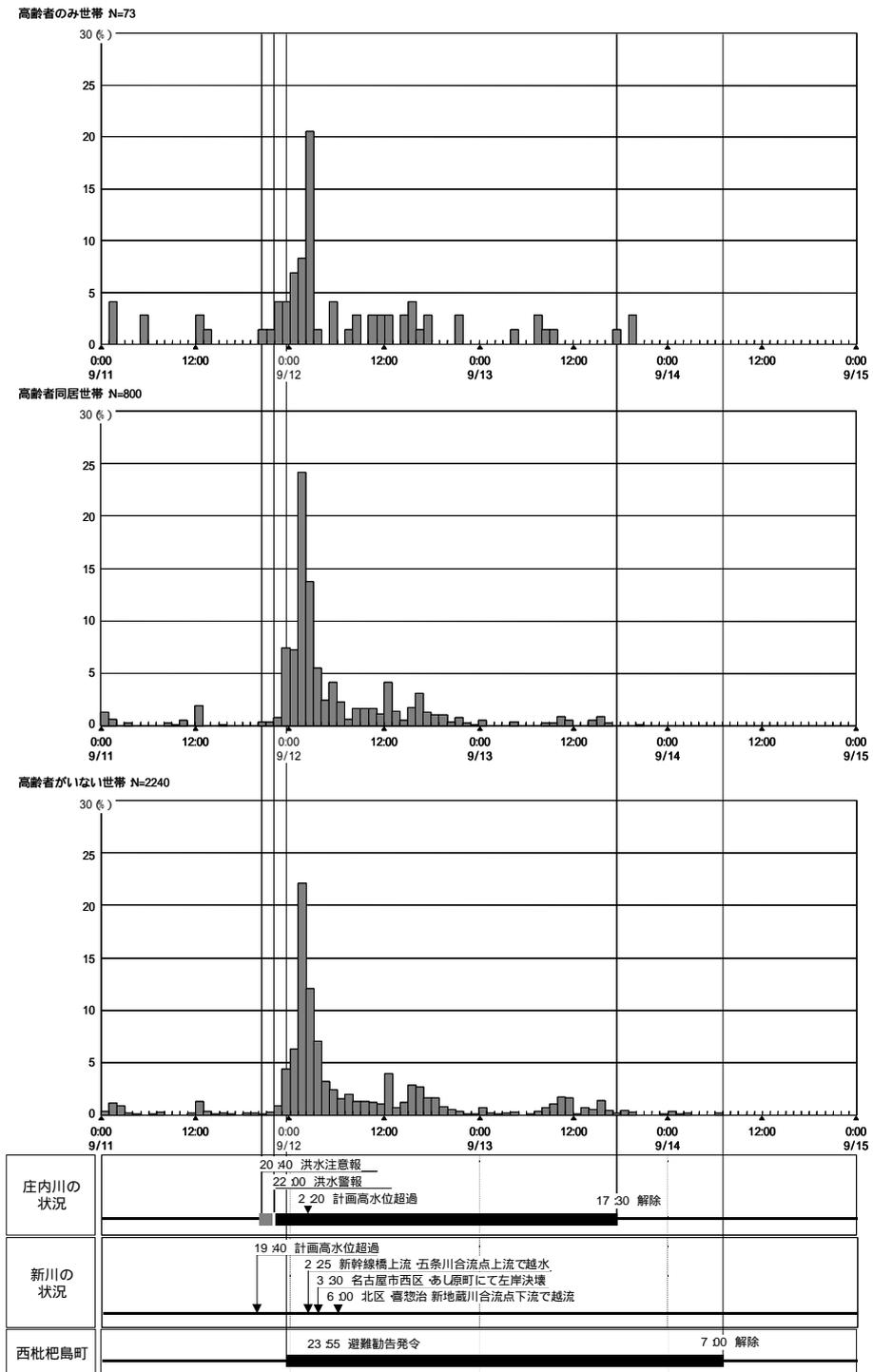


図 18-4-2 世帯形態別の避難タイミング（西枇杷島町）

(2) 高齢者世帯における避難行動の実態

図 18-4-3 は、高齢者世帯における避難行動の実態を把握するために、個人単位の避難行動の状況、ならびに、自力や救出などによって避難行動を行った人の避難手段を世帯別に示す。

- ・ 高齢者のみ世帯において「救出された」が約 20%、「避難したかったができなかった」が 12%となっており、他の世帯よりも多く、援助がなければ避難を行うことが困難な状況にあった高齢者の存在が確認できる。
- ・ 避難手段についてみると、高齢者のみ世帯においては徒歩により避難した人の割合が 64%と高い。

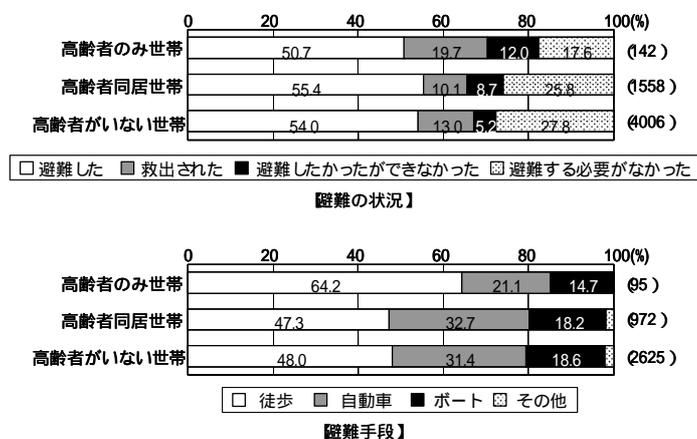


図 18-4-3 世帯構成員別にみる高齢者世帯の避難行動の実態 (西枇杷島町)

18.5 高齢者世帯における避難生活の終了と日常生活の再開

Point

- ・高齢者のみ世帯においては、調査対象地域全体で15%、西枇杷島町だけで見ると30%程の高齢者が、いまだに日常生活を再開していない。
- ・年齢別に見ると、70歳以上の女性で日常生活を再開していない人の割合が多い。

ここでは、高齢者世帯が水害後自宅に戻り、いつ日常の生活を再開したのかを、調査対象地域全体と、西枇杷島町のそれぞれの場合において把握する。

図18-5-1の上段(折れ線グラフ)は、日常生活を再開していない住民を個人単位で性別・年齢別に示したものである。また、下段(帯グラフ)は、日常生活を再開しているのか否かを世帯別に見たものである。それぞれ、調査対象地域と西枇杷島町について示している。

- ・東海豪雨災害から約1ヶ月が経過した本調査の実施時期においても、避難生活を終了して日常生活を再開していない住民が少なからず存在している。
- ・日常生活を再開していない住民は、70歳以上の高齢者において特に多くなっている。
- ・日常生活を再開しているのか否かを世帯別に見ると、高齢者のみ世帯では、日常生活を再開していない人は西枇杷島町で30%を占めており、高齢者世帯においては特に日常生活の再開が困難な状況にある様子が伺える。

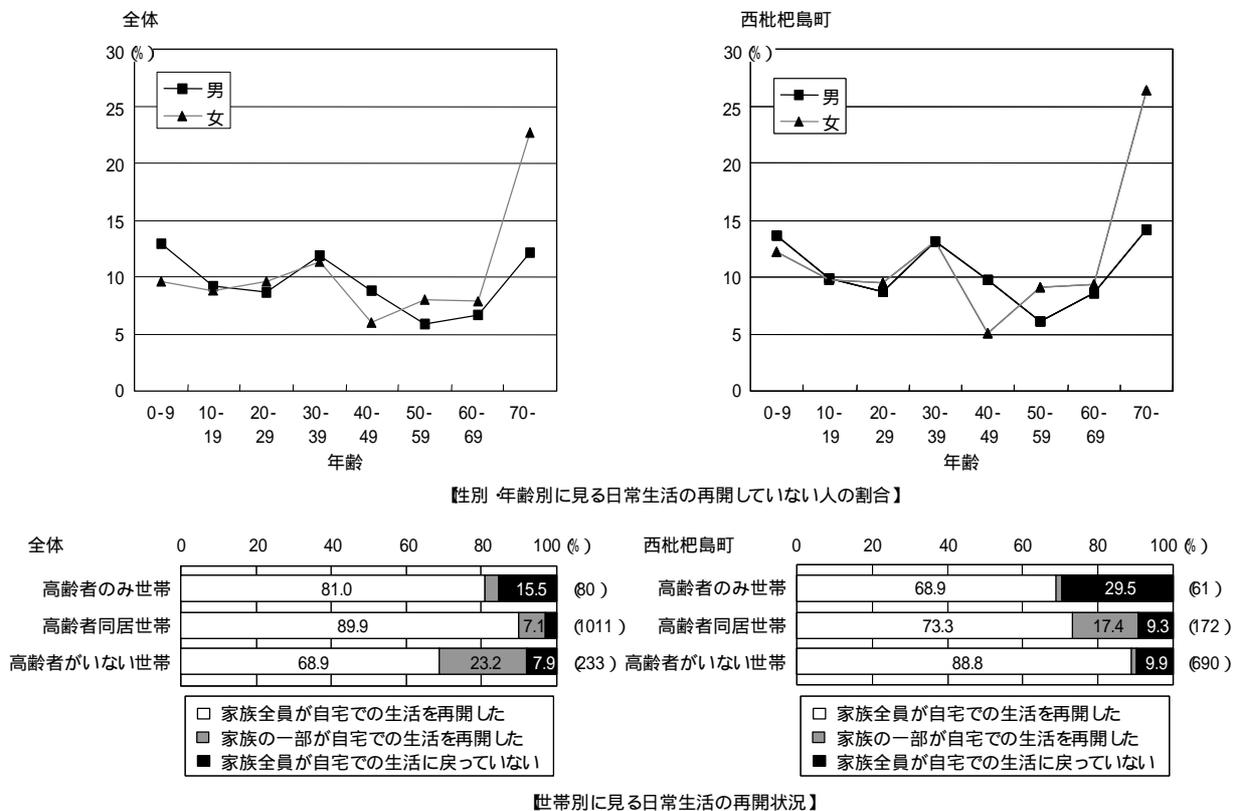


図18-5-1 高齢者世帯にみる日常生活の再開